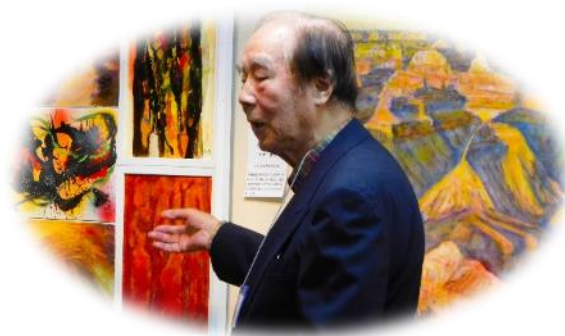


美術部雑感とギャラリートーク

松井健児



65－80歳代約20名で発足した昭和シェルOB美術部は今年8年目を迎える。

90歳代3名、70歳代が若手で会員計15～17名。今年新人2人を迎える予定である。

人は老いるが、作品は老いない。

いや、ますます若くなることすら可能である。

美術・工芸活動の特権であろう。

本展の特徴の一つはジャンルの多さである。

各種の描画・版画・木工・陶芸・工芸アクセサリー・ボトルアート等、計15種に及ぶ。

制作とは自己の考えや訴えたいものを形や色彩を借りて表すために創作活動であり、一般の写生やクロッキーは、画法の基礎取得のための練習である。

下絵はエスキースで、絵画即ちタブローが完成作品である。

各自の経歴により、多様な作品が展示されるのも本展の面白さである。

素人の集団で、作品の経済的価値を望む必要がないのは、幸せなことである。

ギャラリートークによって、作家の創作過程が明らかになり、作品への理解が進み、刺激をうけ、惰性に流されることがなく、大胆に年々変化のある創作作品が展示されることが望まれる。

小生は毎回異なったテーマを設けて作品を制作している。

第7回展では松井健児作品のテーマは'光'とした。

光は数百億年前突如生まれた。天の川は生まれ続けている。

宇宙の光は永遠。人が作る光—例えば花火は人生と同様の瞬時の光。錦秋の丘の光は一年ごとに鑑賞できる。人間は宇宙の子。光の子。人は死んでもその光は永遠。

ギャラリートークでは何が語られたであろうか？

①Immortal F20



②Illusion F30



③Eternal F30



④ Momentary F20

